

自死を望む人への心理臨床家のありかた

桑本 佳代子

I. はじめに

近年、自殺対策が喫緊の課題とされ、平成 18 年 10 月自殺対策基本法が施行され、自殺総合政策大綱が策定されている。年間の自殺者 3 万人と言われて久しく、自殺者数は僅かながら減少しているともいわれているが、中高年男性の自殺者が大きな割合を占め、さらに学生・生徒の自殺者数が増加傾向にある。自殺企図及び既遂者の多くは、様々な悩みにより心理的に追い詰められた結果、うつ病などの精神疾患を発症しており、正常な判断を行えない状態となっているといわれている。

「なぜ生きなければならないのか」「どうして死んではいけないのか」

生死に関する問いは、臨床歴を何年重ねても筆者を苦しめ、無力で小さな一人の人間であることを思い知らせる。心の専門家のはずが、この問いを受け止める知識も能力も覚悟も器もないと思い知らされる。

そうした問題解決の一つの糸口として、Freud,S.の「死の欲動」に端を発する精神分析的な論考がある。21 世紀に入って十数年も経とうという中で、筆者は 1920 年に Freud,S.が提示した「死の欲動」概念に立ち戻った。

Freud,S.は、あらゆる有機体が持つ、最初の状態すなわち無機体へと回帰する生物学的欲求を「死の欲動」とした。死の欲動論は、精神分析の世界で受け入れられたとはいいいがたいようであったが、その後 Klein,M.が、「死の欲動」から発生した「羨望」と名付けられる破壊的な心のあり方を、人間がいかに克服できるかという課題に取り組んだという。

本稿では、精神分析の世界で、生と死が、自死の問題がどのように語られてるのか紐解きたいと思う。そして、人々の死の願望について考えるとともに、自死を望むクライアントにどう向き合っていけばいいのか、筆者の考えを示したい。

II. 死の欲動

1. Freud,S.の「死の欲動」

筆者は死にたいと訴えるクライアントにどう接していけばいいのか苦悶し、Freud,S.の「死の欲動」概念に立ち戻った。死の欲動とは、1920 年の Freud,S.による論文「快感原則の彼岸」において初めて発表された。第一次世界大戦の帰還兵たちに見られた、戦争神経症の症状から、Freud,S.はこれまでの「快感原則」から大きな理論の転換を行った。より緊張が少ない状態、不安が少ない状態こそが快であり、人間は常にその状態を求める傾向があるという快感原則に

さからって、帰還兵は悪夢やフラッシュバックに悩まされていた。また、Freud,S.の孫のエルンストが、母の不在の間、糸巻きを放り投げてはたぐり寄せるということを繰り返していた。Freud,S.は、これを母の不在を再現していると考え、なぜ帰還兵もエルンストも、不快であるはずの状況をあえて再現しているのかと考えた。快感原則に逆らって、不快な体験や虐待などの不愉快な人間関係を反復してしまう現象を、Freud,S.は「反復強迫」と呼んだ。そして、「反復強迫」はなぜおこるのか、あえて緊張や不安を高める方向に動こうとするのか、という視点から構築されたのが、「死の欲動」であった。Freud,S.は、あらゆる有機体が持つ、最初の状態すなわち無機体へと回帰する生物学的欲求を「死の欲動」とした。Freud,S.は人間には「生の欲動」(エロス)と「死の欲動」(タナトス)という二つの欲動が備わっていると考えた。Freud,S.は死の欲動の臨床的根拠として、戦争神経症の不安夢、反復強迫、陰性治療反応、マゾヒズムなどをあげた。

(1)．欲動とは

「欲動」とは何だろうか。筆者にとって、「欲動」とは日常的に馴染みのない言葉である。三省堂「大辞林」によると、「欲動 *Trieb* とは精神分析学の用語。人間を常に行動へと向ける無意識の衝動。Freud,S.によれば、心的なものと身体的なものとの境界概念と位置付けられ、自己保存欲動と性欲動（のちに生の欲動と死の欲動）とに二分された。」と記されている。筆者はここではじめて、聞きなれない欲動という言葉が、精神分析学の用語であることを知った。そして、欲動は「心的なもの」と「身体的なもの」との境界概念であるらしい。となると、心的な「欲求」「願望」「欲望」とも違うし、身体的な「本能」とも違うのであろうことがわかってくる。心的なものと身体的なものとの境界概念である「欲動」でなければならないのである。なお、小此木(2002)によると、用語上の問題として、ドイツ語の *Trieb* は、欲動 *drive*、衝迫 *urge*、欲求 *need* などの意味を含むが、フロイト全集の英訳者ストレイチー *Strachey,J.* は、*instinct* (本能) と訳している。

(2)．Freud,S.とアインシュタインの往復書簡

Freud,S.は、死の欲動の概念を、人々の出来事とどう結びつけているだろうか。そう筆者が疑問に思っている中、死の欲動をめぐる往復書簡が交わされていることがわかった。ひとはなぜ戦争をするのか。それについてアインシュタインが手紙を出し、Freud,S.が返事を書いた。発端は、1932年に国際連盟からアインシュタインへなされた依頼であった。好きな相手を選び、「今の文明でもっとも大切な問い」と思われるものについて、手紙を書いてください。それが依頼の趣旨であった。アインシュタインは相手を Freud,S.と、テーマを「人間を戦争というくびきから解き放つことはできるのか？」とした。なお、この往復書簡は、第二次世界大戦の間、日の目を見ずにきたが、終戦後の1950年に公表されるに至っている。

アインシュタインからの問いに対して、Freud,S.(1950)が用いたのが「生の欲動」と「死の欲動」であった。この二つの欲動は表裏一体と言える部分があり、どちらが善でどちらが悪というものではない、とした。Freud,S.(1950)は「歴史の中にあらわれる無数の残虐な行為、日常生活に見られるおびただしい数の残虐な行為を見れば、人間の心にとてつもなく強い破壊欲動があることがわかる」とし、以下のように述べている。

破壊欲動はどのような生物の中にも働いており、生命を崩壊させ、生命のない物質に引き戻そうとします。「死の欲動」が外の対象に向けられると、「破壊欲動」になるのです。生命体は異質なものを外へ排除し、破壊することで自分を守っていきますが、破壊欲動の一部は生命体へ内面化されます。精神分析学者たちはこの破壊欲動の内面化から、たくさんの正常な現象と病理学的な現象を説明しようとしてきました。冒流的に聞こえるかもしれませんが、精神分析学者の目から見れば、人間の良心すら攻撃性の内面化ということから生まれているはずなのです。このような攻撃性の内面化が強すぎれば、ゆゆしき問題となります。ですが、攻撃性が外部世界に向けられるなら、内面への攻撃性が緩和され、生命体に良い影響を与えます。

この往復書簡は戦争をテーマにしたものであるが、上記によると、死の欲動が内面にむかうと、内面への攻撃性が増し、生命体に悪い影響がでる、つまり、人々が自死に向かうということを行っているのではないだろうか。

ここで筆者が疑問に思ったのは、死の欲動という概念をもとに、自死に向かう人々をどう生かす方向に向かうことができるのか、Freud,S.はあまりふれていないということである。筆者は多くの書物をあたったが、なかなかこの疑問を紐解く解を見つけられなかった。あらゆる有機体が持つ、最初の状態すなわち無機体へと回帰する生物学的欲求を「死の欲動」というのである、という言葉をもそのまま受けると、人々は死のうとする方向に欲動が働くのであり、もう臨床家には太刀打ちできない現象なのである、と言われているようなものである。筆者は、Freud,S.の死後、死の欲動がどう受け入れられたのか、臨床にどう生かされたのか知りたかったが、Freud,S.に忠実だったジョーンズでさえも死の欲動の出発点となった「快原理の彼岸」をさして、「この書物は Freud,S.の著作中、彼に従う者の側でもほとんど受け入れられていない唯一のものである点でも目立った存在である」と述べていた。

この概念をそのまま受け継いで精神分析理論を発展させていったグループはわずかであるが、その少数派がメラニー・クライン Klein,M.とメニングガー Menninger,K.A.である。小此木(2002)によると、メニングガーは、「死の本能と生の本能とのさまざまな融合の段階によって人間の心理学的・生物学的現象が構成される」として、自己毀損・ポリサージェリ・故意の偶発的事故・精神障害などを例にあげて論じた。彼は、生と死の本能が脱融合したり、死の本能が生の本能を圧倒した場合には、自殺の瞬間として自己破壊が結実することがあると考えた。

2. Klein,M.の理論

(1). 死の欲動の応用

Klein,M.(1932)は、乳幼児の観察や児童の精神分析などの臨床経験を通して、それまで想定されていたものよりも、早期に見出される「過酷な超自我」が死の欲動の臨床的な現れであると考えた。彼女は、人間には素質的・遺伝的に、愛情や対象希求の欲求(生の欲動)と、破壊性や攻撃性(死の欲動)を有していて、それらの欲動が内的・外的な対象関係に現れると考えた。

Klein,M.は死の欲動を理論体系の中心に添え、理論的な発展を遂げた。ただ、その過程で、Freud,S.が想定していたような有機物が無機物に変形していく静かな動きではなく、怒りや破壊性に根差した攻撃的な欲動に変化していった。

乳児期早期の妄想一分裂ポジションにおいては、自らに苦痛や欲求不満を押しこむわるい対

象ゆえに、迫害を感じた自己はそのわるい対象に攻撃を向け破壊する。この報復の対象関係がこの時期のオーソドックスな攻撃欲動のあり方である。しかし、羨望では、わるい対象ではなくよい対象を憎み破壊することを目指している。このよい対象を破壊することは、とりいれられてよい自己の基礎となるよいものの供給源を失うことであり、それはつまるところ自己破壊以外の何物でもない。ゆえにクラインは、羨望は死の欲動の最もなまな表出形であるとした。つまり羨望こそが最も猛々しい悪性の攻撃欲動であるとしたのである。

(2) 羨望と感謝

Klein,M.(1957)は、「死の欲動」から発生した「羨望」と名付けられる破壊的な心のあり方を、人間がいかに克服できるかという課題に取り組んだ。

羨望とは、自分以外の人が何か望ましいものを持っていて、それを楽しんでいることへの怒りの感情である。羨望は、初期の幼児にとって、すべてのものである母親との関係に影響を及ぼす。羨望を向けられる最初の対象は、哺乳してくれる乳房である。幼児の願望は、決して飲み尽きることがなく、常に存在している乳房にある。羨望によって傷つけてしまったという感情や、そのために生じてくる非常な不安、対象の良さへの確信の乏しさなどが、食欲さと破壊衝動を増大させる。

Klein,M.(1957)によると、感謝とは、愛情の能力に由来する重要なものであり、良い対象との関係を作り上げるためになくてはならないものである。乳房での十分な満足を得ることは、乳児にとって、愛する対象から自分が大切にしたいと思っている贈り物をもらったのだと感じられることであり、これが感謝の基礎となる。感謝は、良い人物への信頼と密接に結びついており、愛する最初の対象を受け入れ、同化する能力が含まれている。

羨望は、良い外的・内的対象との確かな関係の構築を妨げ、感謝の気持ちを土台から壊し、良いものと悪いものとの区別を曖昧にしてしまう。損ない、破壊するものである。一方で感謝は、良い対象が十分に確立されているならば、この対象との同一化によって、愛する能力が建設的な衝動や感謝などが強められるものである。

そして Klein,M.は、羨望や破壊衝動とかたく結びついている不安や防衛を何度も繰り返して分析することにより、クライアントの人格の統合の進展が成し遂げられると考えた。対象への羨望について分析を進めるとき、敵対的な感情は感情転移の中で分析していくことが必要であり、そうすることでクライアントはこれらの初期の感情を再体験することができる。その中で、徹底操作が極めて重要である、と考えた。与えられる解釈が有効で正しいものであるという体験の繰り返しが、分析者（最初の対象）を良い人物として築き上げる。理想化に基づかずに良い対象としての分析家の摂取がなされると、良い内的対象がもたらされ、抑うつポジションの通過が可能になるとした。

小此木(2002)によると、さらに、現代のクライン学派の精神分析家たちは、死の欲動と羨望との密接な関係（シーガル Segal,H.）や、自己の良い部分を攻撃する内的なオーガニゼーションとしての病的な自己愛の研究（ローゼンフェルド Rosenfeld,H.）など、臨床的な現れとしての死の欲動論について考察を展開している。

Klein,M.は、羨望や破壊衝動と結びついている防衛を繰り返し分析することに意義を見いだしたが、そうであるなら自殺願望の強いクライアントに対して心理臨床家がやるべきことは、

自己破壊へと進もうとする，その背景にある不安，恐怖をくり返し分析していくことなのではないだろうか。

Ⅲ. 自己破壊の背景にある不安，恐怖

1. Klein,M.の絶滅不安

Klein,M.(1946)は、自己そのものの崩壊・消滅にかかわる最も根源的な不安を絶滅不安とし、個体の中で最も強烈になまに体験される死の欲動の活動としての、自己破壊の不安を人生の最早期での体験の中核的なものと見た。そしてそれは、成人した精神病患者が体験する中核的不安と同質であると理解した。妄想一分裂ポジションにおいて乳児は強烈な欲求不満／苦痛の体験下に、初めに自己の無統合状態をきたし、破壊を体験する。そしてクラインは、この原初不安の防衛のオーソドックスな展開として、自己の中に体験されている死の欲動(破壊—攻撃欲動)が対象に投影され、それによって破壊的になった対象からの攻撃として、絶滅不安が迫害不安に変換される変遷を描きだしている。つまり、死の欲動は原初不安の防衛であることが理解される。

2. Winnicott,D.W.の破綻恐怖

Winnicott,D.W.(1963)は、患者が将来、容赦なく起こるであろうと恐れている破綻は、その個人の人生初期にすでに起こっている可能性があるとし、破綻恐怖という概念を提示した。

患者はそれを「思い出す」必要がある。しかしまだ起こっていないことを思い出すことはできない。この過去の出来事がまだ起こっていないというのは、それが起こったとき、患者はそこに居なかったからなのである。この場合「思い出す」唯一の方法は患者がこの過去の出来事を初めて現在の中で、すなわち転移の中で体験することである。この、過去にして未来のできごととはこうして今、ここの出来事となり、患者が初めて体験することになるのである。これは思い出すこと（想起）の等価物であり、その結果は神経症の患者の分析(古典的な Freud,S.派の分析)に起こる抑圧の解除の等価物である。(Winnicott,D.W.1963年，92頁)

Winnicott,D.W.は、構成によって、前例のない意味のつながりを確立した。最初彼は、破綻を原初的な苦悩と呼んだ。Winnicott,D.W.は転移における現在の原初的な苦悩の反復と、すでに生じた原初的な苦悩の、解釈との間に、新しい結びつきを提示している。この構成によって原始的な苦痛は過去のものとして構成される。

3. 破綻恐怖の拡大適用としての死の恐怖

Winnicott,D.W.は、破綻恐怖の基本テーゼを特別な死の恐怖に移しかえるのにほとんど変更はいらない、と述べている。自殺によって解決を見つけられないだろうかと考えて人生を送る人は多いが、それは、精神にすでに起こってしまった死を身体にもたらすということなのである。

「私の（実際に自殺した）精神分裂病の患者が言ったことを理解できる。『お願いしているのは、誤った理由でなく正しい理由で自殺できるようにしてほしいということなんです。』私は成功せず、彼女は解決を見つけられないのに絶望して自殺したのである。（今では私にもわかるが）彼女は私に、あなたは幼児期早期

に死んだのだ、と言わせたかったのである。このことに基づいていたら、年を取って決着がつくまで、私も彼女も彼女の肉体の死を先延ばしにすることができたと思う。(Winnicott,D.W.1963 年)」

Winnicott,D.W.が呈示している精神分裂病の患者についていえば、患者自身がWinnicott,D.W.との分析の中で、「私は幼児期早期に一度（精神的に）死んだのだ」と認めることができていたのなら、肉体の死をさきのばすことができていたのかもしれない。これはいったいどういうことなのだろうか。精神的に死んでいること、肉体的に死んでいること、とはどういった状態なのであろうか。筆者の問いに松木(2016)の臨床実践が答えてくれているように思う。

4. 臨床への応用

松木(2016)は、「死にたい」と強く繰り返し訴える男性との面接を報告している。松木(2016)は、男性との6年間の面接を振り返り、「彼との分析は不毛である」という感覚が深刻なものであったと報告している。そして、「私が理解できていなかったのは、彼が『死んでいるのだ』ということでした、と述べている。

松木の言う、「死んでいる世界」とは、Winnicott,D.W.の破綻恐怖でいうところの、そのクライエントの人生初期にすでに起こっている破綻の世界に、クライエントが心的レベルでいるということなのではないだろうか。セラピストはクライエントがすでに死んだ世界にいるということを否認し、「生きている世界」から話しかけていると、真の意味でクライエントに寄り添うことができていないのではないだろうか。

Ogden,T.H.(2006)は、「死んでいる」について、情緒的に死んでいる体験として用いており、空っぽさの感じが死んでいる感覚へと移っていき、それがまた感覚が死んでいることへと移って、ふたたび空っぽさの感じに戻ってくる、と説明している。

筆者は、これまでの臨床を振り返ると、「死にたい」と訴えるクライエントに対して、死にたいほどつらいのだ、死にたいけれども生きたい気持ちもあるのだ、と理解するにとどまっていた。それは生きているこちら側からの視点であり、理解であった。しかし、一方のクライエントはあちら側（死んでいる世界）におり、そこで「死にたい」と言っているのかもしれない。それゆえ、いくら「生きている」世界からクライエントを理解し、言葉をなげかけても、クライエントとともにいても、それはクライエントには届かないのであった。自殺願望の強いクライエント出会ったとき、クライエントがどの世界にいるのかを感じとることも大切なことなのであろう。そして、クライエントが「死んでいる」世界にいると心理臨床家が感じた場合には、「生きている世界」から話しかけるのではなく、こちら「死んでいる世界」からクライエントを理解し、関わっていくしかないのだろう。

どんなクライエントに会ったときも、心理臨床家は、目の前のクライエントを理解するために目が開かれていなければいけないが、頭で考えたり、気持ちを感じ取ったりするだけでなく、心理臨床家の人間全体で、クライエントを理解していかなければならないのであろう。言葉で言うは易く、行うは難しであるが、自死を選ぼうとするクライエントに関わっていく心理臨床家のあるべき姿が、まだまだ断片的であろうが掴めたように思う。

以上が精神分析の世界で、自死の問題がどのように語られてるのか紐解いた結果である。次

に、精神分析の世界を一步出て、精神分析家以外の臨床家や文学の世界まで広げて、人々の死の願望について考えるとともに、クライアントの自殺願望にどう向き合っていけばいいのか、筆者の考えを示していきたい。

IV. 生き難い生

1. 生への恐れ

熊倉（2000）は、死にたいと訴えるクライアントとの関わりから、「内に根強い自殺衝動を秘めていても、依存を嫌う自立的な性格によって、積極的に訴えることを恥じ、一人、いさぎよく自殺を実行する。治療者が積極的に聴取しなければ、自殺の切迫性は把握できない。いままです精神医療が取り上げてきた自殺念慮に比べて、他者の眼に付きにくい。このような患者が取り上げられないこと自体が、患者特性の反映と理解できよう。治療者が見落としやすく、実に危険な一群である」と指摘している。そして、治療が展開したときに、クライアントの多くが自我の病理を訴えるとしている。生育歴に深く根を下ろした「死に憑かれた自我」、あるいは「死によって構造化された自我」、「死にたい自我」が想定されるという。

さらに、「死にたい自我」から「生きたい自我」への展開として、死の願望の背後にある「生への恐れ」を指摘している。「総てが新しく、理解しがたく、新鮮で怖い。今や世界は過度に豊かで、一つ一つの刺激が患者を圧倒し脅かした。それは真っ白な世界と表現された。鮮烈で多彩な色彩が与えられ留まることなく、直ちに、白の中に消えていくという流動的な世界の比喩であった。自殺念慮を生き延びた後、流動的世界に投げ出された患者が、改めて直面するのは、流動・時間の流れへの恐れ、つまり『生への恐れ』であった」と記述している。

そして、「死にたい」という「死の選択」の背後にあるものは、単に「死の欲動」だけでなく、「生の欲動」との限りない葛藤がある、と指摘している。つまり、生きることが苦しくて、生きにくくて、死を選択するということである。

クライアントは死にたいと訴えながら、生きたいと訴えているのであろう。そして、死ぬことにも生きることにも、苦しみがあるのであろう。クライアントはその苦しみを共有してくれる人がおらず、一人で絶望しているのかもしれない。そうであるなら、筆者はクライアントの苦しみに立ち会い、その生と死の不条理をともにみていくことができるのではないだろうか。

筆者は、クライアントが「なぜ死んではいけないのか」と問う背景には、「どうしてこの生を生きなければいけないのか」という問いがあるのだと思いいたことができた。死にたいと訴えるクライアントの多くは生を生きることが苦しく、それならば死んだ方が楽になれると考えるのではないだろうか。筆者自身が「この辛い生をなぜ生きているのか」という問いに対する答えを持ち合わせていないことに気付いた。

2. 生きがたい生をなぜ生きるのか

なぜ生きているのか、生きる価値があるのか、こんなにつらくてどうして生きていなければいけないのか。生に対する問いも、クライアントからしばしば問われる問いである。筆者はこれまで、なぜ死んではいけないのかという「死」とらわれ、その背景にある「生」への問いに目を向けることができなかった。そんな中出会った短編小説がある。北条民雄氏による「いのちの初夜」である。

(1)．「いのちの初夜」の作者

「いのちの初夜」の作者、北條民雄はハンセン病（以前は、癩病と呼ばれていた。以下、原著を尊重し、癩病と記述する）であった。昭和 11 年、23 歳のときに、入院初日における自らの体験を書いた「最初の一夜」が後に川端康成によって「いのちの初夜」と改題され、「文学界」に発表された。この中篇は小林秀雄から絶賛されるなど大きな反響を呼び、文学界賞を受賞した。しかし当時、癩病の宣告は生きながらの死刑宣告にも等しく、自殺を思いとどまる日々の連続だったという。

(2)．「いのちの初夜」あらすじ

「いのちの初夜」の主人公、尾田は、癩病の入院施設に入院することになった。病気の宣告を受けてから半年の尾田は、樹木を見ると必ず自死できる枝ぶりをさがす日々を過ごしていた。

入院初日、初めて見る重症者の姿に尾田は大きなショックを受け、この院内で死んではしないと強く思い、院外に出て首つり自殺を試みる。しかし、死ぬと思って帯から首をはずす。先輩患者の佐柄木に呼び止められ、病室に戻る尾田。佐柄木は自らも癩病でありながら、重症患者の付添夫をしている。佐柄木は片目が義眼で、もう一方の目もほとんど見えなくなっている。

病室に戻った尾田は、重症患者が氣息奄々と眠っていた様子に、「惨たらしくも情欲的な姿」をみる。佐柄木は書きものに余念がない風で、真夜中にも分厚いノートにぎっしり書き込みをしている。そして尾田に話しかける。

「ね尾田さん。この人たちは、もう人間じゃあないんですよ,, , 生命です。あの人達の『人間』はもう死んで亡びてしまったんです。ただ、生命だけが、びくびくと生きているのです。なんという根強さでしょう。誰でも癩になった刹那に、その人の人間は亡びるのです。けれど、新しい思想、新しい眼を持つ時、癩者の生活を獲得する時、再び人間として生き復るのです。新しい人間生活はそれから始まるのです。尾田さん、あなたは今死んでいるのです。一たび死んだ過去に人間を捜し求めているからではないでしょうか」、「盲目になるのはわかりきっていても、やはり僕は書きますよ。盲目になればなったで、またきつと生きる道はあるはずです。あなたも新しい生活を始めてください。癩者に成りきって、さらに進む道を発見してください。僕は書けなくなるまで努力します」。

(3)．生きがたい生をどう生きるか

まず主人公の尾田が、施設に入院するまえに何度も自殺企図を試みたことについて考える。当時、死の宣告に値する癩病に罹患した尾田は、生きることに絶望し、死が間近に迫っていると感じていたであろう。当時、治ることがないと見込まれた不治の病に罹患した者であれば、死を考えることは想像するに難くない。実際、絶望している尾田は、自殺に適する木の枝があれば自殺におよんでいただろう。それほどの切迫した死の願望が尾田にはあった。

入院施設ではじめて見る重症者の姿に衝撃をうけ、尾田は、施設を抜け出し首つり自殺を実行した。図らずも失敗したが、その後も死の願望を手放せない。思うに、尾田は死の願望にとらわれており、死以外の選択は考えられなかったのであろう。

その後尾田は、佐柄木に、「誰でも癩になった刹那に、その人の人間は亡びるのです,, , しかし新しい思想、新しい眼を持つ時、癩者の生活を獲得する時、再び人間として生き復るのです。」

と語りかけられている。ここで、佐柄木は三点のことを言っている。癪になった刹那に、その人は死んでいるということ。しかし力強い生命が脈々とあるということ。そして、再び人間として生き復ること。

一点目の、癪になった刹那にその人は死んでいるということは、癪になる前の過去の生活は、すべてなくなって消滅しているということであろう。佐柄木も述べているが、ひとたび死んだ過去に人間を捜し求めているからこそ、尾田の苦悩や絶望は色濃くなるのであろう。過去の生活を、死んだものとして受け入れること、受け入れようとするのが、絶望から人を救う唯一の方法なのではないだろうか。次に、二点目の力強い生命が脈々とあるというのは、過去の社会生活は死んでしまっても、生きていといえない廃人の状態であるとしても、生命そのものはその下でびくびくと脈打ち死んではないということであろう。三点目の再び人間として生き復るといことは、新しい視点に開かれ、視界が大きく眼前に広がり、新たな思想や考えを得て、生を獲得するということであろう。

前述したように、ここに筆者は Winnicott,D.W.の破綻恐怖を思い出す。尾田は一たび過去に死んだ自分を受け入れることができず、自死することで死を招こうとしていた。しかし、過去に自分は死んだのだと受け入れることが、新しく生を生み出すことになるのではないだろうか。

そして佐柄木は尾田に言う。「盲目になればなつたで、またきつと生きる道はあるはずです。僕は書けなくなるまで努力します」。なんと力強い言葉であろうか。この佐柄木のありようを見て、筆者は Camus,A.の「シーシュポスの神話」を思い出した。

3. 人生は生きるに値するか

Camus,A.(1942)は「シーシュポスの神話」の中の「不条理と自殺」において、「真に重大な哲学上の問題はひとつしかない。自殺ということだ。人生が生きるに値するか否かを判断する、これが哲学の根本問題に答えることなのである」と述べている。そして、ひとが、この世に存在することをやり続けている理由の一つとして習慣があるとし、「みずから意志して死ぬとは、この習慣というもののじつにつまらぬ性質を、生きるためのいかなる深い理由もないということ、日々の変動のばかげた性質を、そして苦しみの無益を、たとえ本能的にせよ、認めたということを前提としている」と述べている。Camus,A.(1942)は「みずから手で死んでゆく人びとは、自分の感情の斜面にしたがって、その最後まで滑り落ちてゆくのである」とし、「死に至るまでのつらぬかれた論理が存在するか」と問題提起し、みずから死んでゆく人びとを「かれらは自分の生命というかれらのもっとも貴重な持ち物を放棄した」と批判する。最後に Camus,A.(1942)は、真の努力とは「可能なかぎりその場に踏みとどまって、この辺境の地の奇怪な植物を子細に検討することなのである。不条理と希望と死とがたがいに応酬しあっているこの非人間的な問答劇を、特権的な立場から眺めるには、粘り強さと明徹な視力とが必要である」とし、「精神はそのさまざまなフィギュアを分析し、つづいてそれを明示して、みずからそれをふたたび生きることができる」と締めくくっている。

筆者がこれまでに会った死にたがる人々は、「死に至るまでのつらぬかれた論理」を持ち合わせていたであろうか。自らの生について、見ることを恐れ、現実をみつめていくことを避け、傷つくことを恐れていたのではないだろうか。生きがたい生をどう生きていけばよいのかを考えることを放棄してしまったのではないだろうか。

「シーシュポスの神話」では、Camus,A.の主張が神話の形を借りて明確に示されている。シーシュポスは大きな岩を山頂に押して運ぶという罰を受けた。シーシュポスは岩を運ぶのだが、山頂に運び終えたその瞬間に岩は転がり落ちてしまう。しかしシーシュポスは、意思をもっていきいきと岩を運び続ける。Camus,A.はいう。「シーシュポスは、自分の岩のほうへと戻りながら、あの相互につながりのない一連の行動が、かれ自身の運命となるのを、かれによって創り出され、かれの記憶のまなざしのもとにひとつに結びつき、やがてかれの死によって封印されるであろう運命と変わるのを凝視しているのだ」。このシーシュポスのありようは、癲病を患い、失明の危機に瀕しながらも、それでも書き続けようとしている佐柄木のありようと同じなのではないだろうかと筆者は考える。

V. 自死を選ぶ人への心理臨床家のあり方

1. 円環としての生と死

前述の「いのちの初夜」「シーシュポスの神話」から考えるに、真の努力、真に生きることとは、可能な限りその場に踏みとどまって、この世界のあり様を子細に検討することなのだと思う。不条理と希望と生と死とが絡み合った劇場の上で、粘り強く生き続け、時に芝居を眺めることなのであろう。

丸山(1989)は、Freud,S.の欲動論について「生の欲動も死の欲動も,,, (中略) ,,ベクトルの違いがあるだけで、実は同一なる生の円環運動の一契機として位置づけられねばならないのである」と述べている。丸山の述べるところによると、欲動は、生でもなく死でもなく、生でもある死でもある、ということになる。

Freud,S.は、生の欲動と死の欲動を別のものとしてとらえたが、筆者も丸山の言うように、欲動は生でもなく死でもなく、生でもある死でもあるということに賛同する。「森のイスキア」には、全国から悩み多き人たちがやってきたという。人々は、佐藤初女さんが作るおむすびやぬか漬けを食べると、活力を得て帰っていくという。佐藤さんのおむすびを食べて、死ぬのをやめた人もいるという(佐藤, 2015)。筆者はこの話を聞いて、生にあふれる日常性に、死を癒す力があるのではないかと思った。もちろん、心理療法家としてクライアントの生の欲動、死の欲動に向き合っていること、**aggression**を取り扱っていくことも重要であるが、生と死の持つエネルギーは円環しており、佐藤さんのような生のエネルギーが死のエネルギーに触れ、化学反応を起こすということもあるのではないだろうか。ここには、生と死のおりなす同時性というものがあるのではないだろうか。

2. 心理臨床家として

神谷(1980)は、病、死といった、生きがいをうばい去られるような状況を限界状況とよんだが、癲病に罹患した尾田も限界状況にあったといえよう。尾田はその限界状況に自殺という解を見出したのであろうが、この段階で筆者が尾田に出会ったとすれば、心理臨床家として何ができるであろうか。当然、自殺以外の解を一緒に見出そうと努めるであろう。しかしそうはいっても簡単には見つからないものであろう。

人はみないずれ死ぬ。不治の病に苦しんでいる人も、何の病気もなく元気な人も、成功している人も、思い通りの成果を得られない人も、死にたいと訴えるクライアントも、そんなクラ

イエントになんとか生きてほしいと望む筆者も、みないずれ死ぬ。しかし筆者は、最後まで自分の意思をもって生き続ける人の生は、なんと輝いていることであろうかと考える。佐柄木のように、たとえ書き続けることができなくても、自分の意思を実践することが難しくなったとしても、書き続けたいという思いがあることが、素晴らしいことなのではないだろうか。

限界状況ににいるということ、自殺に向かおうとしていることそれ自体が、生きていることであり、生や死と格闘している彼その人であるのではないだろうか。ナチスの強制収容所に収容されていた、精神科医の Frankl,V.E.(1947)は、活動すること、愛すること、そして最後に苦悩することで意味のある人生を実現できると述べている。Frankl,V.E.(1947)はリルケについてとりあげ、「リルケは働くことで意味のある人生をおくることができるのと同じくらい、苦悩することで意味のある人生をおくことができるとわかっていた」と言っている。

苦悩することが意味のある人生であると、誰が考えるに至るであろうか。仕事、家族、生きがい、心身の健康を失って、それでも苦悩していることこそが意味があると、心から思える人がどれほどいるのだろうか。しかし筆者は、生きがたい生を生きる、そこに意味を見出したい。筆者は死に直結する不治の病に罹患している方や、もう自分の病気が治らないと悲観してしまっている方に出会ったとき、その方が苦悩することに寄り添い、目を背けることなく、その方が生きようとしていること、死のうとしていること、その視線と共にありたいと思う。そして、その視線を、できれば生へとつないでいきたいと思う。これこそが、心理臨床家の持つべき視点なのではないか。少なくとも筆者はそう思う。その人が、自らの生死を引き受け、自らの生を生きようともがく姿こそ、もっとも人間らしく、輝いているのではないだろうか。

以上が筆者が現在のところたどり着いた考えである。

Ⅵ. おわりに

歌える事が命 伝える事が魂

私には声 それぞれ何か 授かった理由がある

人はみんな役目を持って 果たす為生まれてきたのよ

誰かの為にがんばる姿をさらけだして生きてゆくのよ

なぜ こんなにも 生きてることは 愛おしいの？

生きてるってことなの？

(KOKIA 歌う人)

日本音楽著作権協会（出）許諾第 1709890-701 号

歌手 KOKIA の「歌う人」の歌詞である。筆者はこの歌詞に、自らの生死、運命を引き受け、それでも生きようとする人間としての可能性をみる。誰しもが、生きる意味を持ち、生きる姿をさらけだしている。その生は、皆輝いており、誰と比較することもない絶対的な唯一無二の存在なのではないだろうか。

謝辞：本論文作成にあたり、ご指導いただきました高橋靖恵先生、乾吉祐先生に深謝いたします。

VII. 参考文献

- Camus,A. (1942). *Le Mythe De Sisyphe*. Paris : Editions Gallimard. 清水徹 (訳) (1969). シーシュポスの神話. 168-173. 新潮文庫.
- Frankl,V.E.(1947). *Trontzdem Ja zum Leben sagen*.2Aufl.,Franz Deuticke,Wien:山田邦男, 松田美佳 (訳) (1993). それでも人生にイエスと言う. 春秋社.
- Freud,S. (1920). *Beyond the Pleasure Principle*. In J.Strachely(Ed.),*Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud:Volume X VIII*pp.1-64).London:The Hogarth Press.井村恒郎 (訳) (1970). 快感原則の彼岸. Freud,S.著作集 6, 150-194. 人文書院.
- Freud,S. (1950) *Brief an Albert Einstein*. 浅見昇吾 (訳) (2016). 人はなぜ戦争をするのか. 講談社学術文庫.
- 北条民雄 (1955). いのちの初夜. 角川文庫.
- 神谷美恵子 (1980). 生きがいについて. みすず書房.
- Klein,M.(1932).*The Psycho-Analysis of Children*. London: The Horgan Press. 衣笠隆幸訳 (1996).メラニー・クライン著作集第2巻 児童の精神分析. 誠信書房.
- Klein,M.(1946).*Notes on Some Schizoid Mechanisms:Envy,and Gratitude and Other Works*. 小此木啓吾, (1985). メラニー・クライン著作集第4巻 妄想的・分裂的世界. 誠信書房.
- Klein,M.(1957).*Envy and Gratitude. A Study if Unconscious Sources*. London: Tavistock Publications. 松本善男 (訳) (1975). 羨望と感謝. みすず書房.
- 熊倉伸宏 (2000). 死の欲動 臨床人間学ノート. 新興医学出版社.
- 松木邦裕, 藤山直樹 (2016). 愛と死 生きていることの精神分析. 創元社.
- 丸山圭三郎(1989). 欲動. 弘文堂.
- 小此木啓吾(2002). 精神分析事典. 岩崎学術出版社.
- 佐藤初女(2015). 限りなく透明に凜として生きる——「日本のマザー・テレサ」が明かす幸せの光. ダイアモンド社.
- Winnicott,D.W.(1963).*Fear of Breakdown:psycho-analytic Explorations*. 館直彦(訳) (2001). ウィニコット著作集第6巻 精神分析探求1 精神と身体. 岩崎学術出版社.

(臨床実践指導学講座 博士後期課程3回生)

(受稿 2018 年 8 月 29 日, 改稿 2018 年 11 月 19 日, 受理 2018 年 12 月 21 日)

自死を望む人への心理臨床家のありかた

桑本 佳代子

死にたいと訴えるクライアントにいかに関わっていくのか考えるため、フロイトの「死の欲動」に端を発する精神分析の論考を紐解いた。その中で、クラインの「羨望と感謝」、ウィニコットの「破綻恐怖」を取り上げた。そして、人々の自殺願望の背景に、生育歴に深く根を下ろした死に憑かれた自我があること、「死にたい」というと同時に、「なぜ生きているのか」という問いがあることを見いだすとともに、生の欲動も死の欲動も、同一の円環として位置づけられることに気づいた。さらに不治の病に苦しんだ著者の著作を通して、過去の生活を死んだものとして受け入れること、受け入れようとするのが、絶望から人を救う唯一の方法なのではないかと考えた。自殺願望の強いクライアントに対して心理臨床家がやるべきことは、自己破壊へと進もうとする、その背景にある不安、恐怖をくり返し分析していくことであると見出した。

Psychological Clinician's Way to Those Who Desire Self-Death

KUWAMOTO Kayoko

To think about how to involve clients appealing for death, they unleashed Freud, S. 's psychoanalysis originating from the "the death drive". Among them, Klein, M's "Envy and Gratitude", Winnicott's "Fear of Breakdown" was picked up. And, as a background of people's suicidal desire, there is a death possessed ego deeply rooted in the growth history, not only that "I want to die" but also that there is a question of "why I am alive" I noticed that both raw living and deadly desires are positioned as the same annulus. Furthermore, through the work of the authors who suffered from incurable diseases, I thought that accepting and accepting past lives as dead was the only way to save people from despair. I found that what psychologists should do for clients with a strong desire to suicide is to repeatedly analyze the anxieties and fears behind them trying to advance to self - destruction.

キーワード：死の欲動,羨望と感謝,破綻恐怖

Keywords: Death drive , Envy and Gratitude ,Fear of Breakdown